

# 崩壊する一枚岩の毛・林体制

中国のNo.2林彪の姿が消え、党理論誌は「陰謀家」攻撃を始めた。中国で何が起きているか



毛沢東(左)につく実力者林彪の共演もさやかれている

## 大河のなかの逆流と淀み

中国がいよいよ国際社会に本格的な登場を開始した。ここ数カ月、中国は淀むことなき大河のような勢いで全世界を席巻しつつあるかのようであった。とくにわが国には、日中関係の打開を迫る内外の潮流のなかで、中国の影が一段と色濃く蔽いかぶさっている。

だが同時に、そうした中国の影を透かして、中国でいま、なにか重大な事態が進行しているのではないかという懐疑や不可解も重く沈澱しはじめている。ただでさえ「情報的要素」の多い中国のその真の姿は、様々な訪中者の「見聞録」やルポルタージュが溢れているにもかかわらず、こうして、また再びとらえがなくなっている。

中なか  
嶋しま  
嶺みね  
雄お

(東京外語大助教授)



不幸なことに、こと中国問題ではひたすら「前向き」になること、「中国傾斜」の度合ができるだけ大きいことを標準にし、反面では無責任な商業主義を競い合っているわが国のマスコミは、問題をもっぱら外電で逃げるだけで、こうした懐疑や不可解に答えようとはしない。

他方、わが国の知的世界では、文化大革命が与えた衝撃と問題性あまりにも大きかったためか、その後の事態の変化については、「分析回避」、「思考停止」の状況が支配的である。

だが、文革の経過だけでもここで一寸ふりかえってみよう。一九六五年末から翌六六年前半の「文芸整風」といわれた段階で誰が劉少奇国家主席ら相次ぐ最高指導者層の失脚を

予想し得ただろうか。私自身、一九六六年六月初旬、劉少奇失脚の可能性に初めてほんのりと触れたが(拙稿「毛沢東体制の動揺」、『朝日ジャーナル』一九六六年六月十九日号)、それでさえかなりの遠慮と勇氣を要することであった。

ところで、あれほどの激動と混乱と犠牲という代価のうちに強権的に確立されたと思われた毛・林体制がいまや完全に内部的な変容を遂げつつある兆候と諸事実を、私はいま語りはじめねばならないのである。しかも、毛沢東主席の後継者として明文化された林彪副主席の失脚説さえ、外電はすでに報じはじめている。

中国が今日のように世界を揺り動かしているそのときに、もしも林彪が失脚しているとするならば……われわれは文革とはそもそもそんなのであったのかを改めて考え直さねばならぬ以上に、中国の民衆はでは一体、今日の体制に何を期待し、政治をどのように信ずることが出来るのだろうか。文革とは、そもそも中国人大衆の伝統的な政治不信を潜在的基盤として生起し得た毛・林主流派の「クアータ」ではなかったかとも思われるが、そうした事態は一度発生してしまつと歯止めを知ら

ない自己転回を繰り返さざるを得ない宿命にあるような気がする。

そのようなとき、中国共産党理論誌『红旗』最新号(一九七一年第十二号)の河南省党委員会論文「積極的に思想闘争を展開し、党の団結をさらに増強せよ」は、いま新たに、「党内にもぐり込み、マルクス主義の旗印を掲げてマルクス主義に反対しているブルジョワ的野心家、陰謀家」が党の最上層に存在していることを指摘して、これら「野心家、陰謀家」の暴露を強く呼びかけている。

つまり、林彪失脚説がモスクワ放送やタス通信によってさえ流されているとき、そしてまた、去る九月中旬以降の相次ぐ「異変」への関心と注目が外部世界で高まっているとき、こうした新しい事態の発生を中国指導部が自ら示唆しはじめたのである。

もとより私は、今日の「異変」について、不可解のすべてを解き得る確定的な材料もちあわせてはいない。ただ、そうした重大な事態の背景を分析的に語り得るのみである。

そして、そのためには、文革の一応の「成果」が全面的に吸収された九大大会(一九六九年四月)以降の中国の政治過程をまずあ

づけねばならないが、そうした作業のなかで今回の「異変」を考えれば、それは必ずしも「異変」ではないとも思われるし、また一方、それだけに今回の「異変」は重大な意味をもっているとも思われる。ではここで今回の「異変」とはどのようなものであるのかを、まず分析的に整理しておこう。

### なぜ「異変」なのか

北京特派員の常駐を誇示しているわが「朝日新聞」が、奇妙なことに、そして、この新聞からしからぬことに、九月十九日北京発の「AFP時事」電を同紙一面の六段ぬき囲み記事で掲載し、中国各地で「毛主席の肖像、あいつぎ姿を消す」と伝えたころ、すでに今回の「異変」を予測させるような兆候が、たとえば香港あたりではしきりにささやかれていた。しかも、こうした微妙な「非毛沢東化」現象は、すでに昨年あたりから出はじめており、たとえばいわゆる「集団指導制」の問題にしても、この一年來、「人民日報」の小さな記事や論文のなかでしばしば指摘されてきていた。

日本の新聞ないしは北京特派員が、これらの問題に気づかなかつたか、気づいても報じ

なかっただけのことであった。

去る九月下旬、香港の『星島日報』は、その後の北京発外電に先がけて、毛沢東の写真やスローガンが一部で消えはじめたことを伝えており、九全大会の文献や「新憲法草案」が中国内部で回収されはじめていること、また『紅旗』編纂部の改組説なども伝えられていた。

これら一連の兆候は、去る八月七日以来、毛主席が姿を見せなかった事実や、九月二十三日、中国の全国向け放送が『毛主席語録』を通例どおりに放送しなかったことなど重なって、例のごとく毛沢東重病説や死亡説が流布され、様々な話題を提供したことは周知のところである。

毛主席の健在はやがて十月八日、エチオピア皇帝ハイレ・セラシエ一世と会見したことが公式に報道されて、ともかく証明を得たが、北京には九月十一日から十五日まで、謎の五日間という「空白」があった。

事後確認された事実を時間的に並べてゆくと、まず十日夜、それまで例年どおりに進められていた国慶節のパレード準備が中断し、ついに十二日には全面的に中止された。その十二日夜、のちに明らかになったように（タ

ス通信、九月三十日発表）、中国空軍のジェット機がソ連領に近接するモンゴル領内奥地でミステリアスな墜落事件を起し、世界を驚かせた。

中国外交部スポークスマンは、のちに、この飛行機は民間旅客機で進路を誤ったものと語ったが、ソ連・モンゴル側は同機が空軍ジェット機であり、墜落地点から九名の焼死体と火器、文書、装備が発見されたと公表した。そして、十三日から十五日まで中国のすべての軍用機および大部分の民間機を含む国内航空が全面的に停止されたことが明らかにされた（『ワシントン・ポスト』十月二十一日付香港特派員電）。

この件については、国府国防部の葉翔之、情報局長が九月十五日以降も軍用機はほとんど停止状況にあると、中国にたいして警戒・諜報飛行をおこなった結果を外人記者団に発表し（十月九日）、マッケーン米太平洋軍司令官も国防総省での記者会見で中国の飛行停止継続を確認している（十月十四日）。

この間、自民党訪中団長・川崎秀二氏が香港での記者会見で語ったところによると、代表団と周恩来総理との会談日程が当初の九月十一日には実現せず突如十六日に延期され、

この件について中国側から「党に重大な問題が起っているのではないか」との説明があったとされ、十二日夜、人民大会堂前を通った際、大会堂にこうこうたる照明が見られ、その前に五、六十台の乗用車が停車して、中国側代表員から「会議が開かれている」との説明があったという（『毎日新聞』九月二十三日付ほか）。しかも、この間、周恩来は十三日から十五日まで外国要人との会見にもまったく姿を見せなかった。

一方、この時期までしばしば内政・外交の重要な席に連日のように登場し、九全大会以降の中央リーダーシップを精力的に担ってきた党中央政治局の軍人、黄永勝・総参謀長、吳法憲・副総参謀長兼空軍司令員、李作鵬・副総参謀長らが、それぞれ九月十一日、九月八日、九月十日から消息を断ち、今日まで約二カ月半、まったく姿をあらわさなくなってしまう（邱会作・副総参謀長も九月二十四日以降、姿を消している）。

### 恒例の共同社説も中止

やがて、九月二十一日になると、A D P はかの外電は、国慶節のパレード中止説を伝えた。そして日本の共同通信ほか各社の電報が

わざわざ北京の意向を汲みとろうとするかの  
 ように、中国は「パレード中止説、一笑」と  
 か、パレード中止は「地道な建設を指向」す  
 るためとか、「エネルギーを生産に向ける」  
 ためとか、「形式よりも内容」を重視するた  
 めとか、国費節約のため、ソ連式の祝賀形式  
 から訣別するため、中ソ国境の緊張によるた  
 め等々、各種の解説を試みたにもかかわら  
 ず、中国政府スポークスマン（外交部新聞  
 司）は、翌二十二日、パレード中止を公式に  
 発表した。日本の特派員諸氏がおこなった右  
 のような解釈は、つい先日まで、例年どおり  
 準備が進んでいた国慶節パレードがなぜ突然  
 中止になったのか、もしも、そのような理由  
 であるなら、なんらかの公式見解によって中  
 国民衆にその旨を告げるべきなのにそれをし  
 ないのはなぜかといった疑問に答えていない

ばかりか、中国政治の本質とその表現形式に  
 たいする驚くべき無理解をも示していた。

中国の国慶節をめぐる一連の行事は、従  
 来、天安門楼上に登る首脳者の順列やその発  
 表形式についてはいうまでもなく、天安門上  
 からの大衆接見そのものが、たんなる慶祝の  
 セレモニーではなくして、たえず変動する中  
 国の政治過程に深くビルト・インされた政治  
 的儀式であり、また、指導者と大衆とが政治  
 的な熱狂のなかで情緒的に結合され、一体化  
 する象徴的なハブニングだったことを忘れて  
 はならないであろう。

やがて中国側は、九月二十九日、国慶前夜  
 祭として周恩来総理が主催し、内外の賓客を  
 招く恒例の大夕食会も本年は中止し、レセプ  
 ションのみをおこなうと発表した。実際に  
 は、このレセプションにも政治局員クラスの

首脳（五名の政治局常務委員と二十名の政治  
 局委員および候補の計二十五名）で姿を見  
 せたのは董必武・国家副主席と李先念・副総  
 理の二人のみで、残りの二十三名の首脳は誰  
 も姿をあらわさなかった。

翌十月一日、注目のうちに迎えた建国二十  
 二周年の国慶節当日、北京では中山公園や万  
 寿山など六カ所に分散して慶祝行事がおこな  
 われ、秋晴れのこの日を歌や踊りの華やいだ  
 雰囲気なかで市民は過したと伝えられた  
 が、「異変」にかんする謎はついに解き明され  
 ず、むしろますます深まるばかりであった。

まず第一に重大な問題は、恒例の「人民日  
 報」ほかの共同社説が発表されなかったこと  
 である。国慶節に共同社説（もしくは「人民  
 日報」社説）が出ないことはこれまでの二十  
 二年間になくことであった。

## 新刊案内

### カライ城と城下町

山溪玄朗  
 カイト 48

文||能坂利雄 幾多の戦国武将たちの哀歎を秘め  
 た名城・古城と、今なお伝統美を残す城下町をカ  
 ラーで紹介。歴史の主人公たちにスポットを当て  
 た解説と共に城の魅力を探る 発売中・五八〇円

瓜生卓造著 深々と雪の積もった街に紺碧の  
 大空がひらけ万国旗がはためく国際都市、札  
 幌。その百年に渡る開拓の歴史と魅力の数々  
 を作家の目で綴った好著 発売中・三五〇円

### 札幌という街

山溪玄朗

### 山と溪谷社

東京都港区芝公園第5号地12番  
 図書目録 愛知道里/乞註名記入

國慶節の慶祝方法を変更したのならその旨を大衆に熟知せしめるべきでもあっただろうし、なによりも今日のように中国が世界の注目を浴び、国連での中国代表権問題もいよいよ煮つまっている時期に、中国は当然、全世界に向けて堂々たるアピールをするものと誰かが予想したであろう。

第二には、例年、そして、ここ数年は『人民日報』、『光明日報』ほかの機関紙に毛主席と林彪副主席の写真が全紙大で掲載されたのに、こうした掲載がなかったことである。

第三には、当夜の花火大会も中止されたほか、当日のレセプションなどを通じて、二十五名の中央リーダーシップのうち姿を見せたのは周恩来、張春橋、江青、李先念、葉劍英の五名のみで残る二十名はついに姿を見せなかったことである。

第四に、文革のさなかからしばしばその開催が公式・非公式に予告され、約束され、本年の國慶節までには開催されると見なされていた全国人民代表大会についても、ついになんらの言及もなかったことである。こうして中国はいまだに国家体制移行行政機構の再建を制度的には完遂しないまま、一九六四年以来七年間を経過しようとしていることになる。

このように、疑問は深まるばかりであったが、にもかかわらず日本の新聞は、その多くが、「中国、文革後の安定を誇る」として当日の模様を報じていたことにも注目しておいてよいだろう。

次に、毛主席の健在は十月八日になると前述のように伝えられたものの、はやくも十月四日、英紙『フィナンシャル・タイムズ』は謎解きの一環として林彪失脚の可能性に言及し、やがて十月十日以降は、『ニューヨーク・タイムズ』ほかの外電や国府筋も林彪重病説、死亡説を流しはじめた。

ハンガリー通信が北京十月一日発で伝えているように、國慶節当日も北京で『毛主席語録』がほとんど見かけられなるとしたら、それは『語録』の編集指示者・林彪との関連、そこに刷り込まれた林彪の序文との関連のためではないかと思われるようになってきた。

こうして、本年六月三日に毛沢東とともにチャウセスク・ルーミアニア国家評議会議長と会見して以来、約六カ月にわたって公式の場に姿を見せなくなった林彪の消息は、彼の生来の病弱ともからんで多くの憶測を生んだ。もとより、林彪がたんなる病弱ではないであろうという推測を否定できないのは、九月以

来の『異変』が背景にあるからにほかならない。

しかも、林彪を含む軍関係者は相次いで消息を断ち、中央政治局についても葉劍英以外のあらゆる軍関係者（林彪、劉伯承、朱德、葉群、許世友、陳錫聯、李作鵬、吳法憲、邱会作、黃永勝の十名）が今日、ともかくも消息不明になったままである。

林彪にふたたび焦点をしぼるなら、六月四日以降、消息を断っている林彪の言葉が中国の公式報道、つまり『人民日報』に引用されたのは九月十日付の国家計画委員会執筆小組の「大慶に学ぶ」工業建設についての論文を最後としており、そこでは革命と生産をとともに重視すべきだという林彪の発言が引かれているが、それ以後、林彪の言葉は、たとえば湖北放送のような地方放送が九月二十七日までそれを引用していたのを除いて、中央では一切引用されなくなっている。

また、林彪にかんする言及は、九月十二日の『人民日報』が毛沢東写真集を発表した際、林彪を従来どおり「毛主席の親密な战友」として紹介したのが最後になっている。

十月十三日のAFP電は、九月二十八日発売の『中国画報』に毛沢東と並んだ林彪の写

真があったが、この『中国画報』は北京ではまもなく入手できないものになってしまったと伝えている。

こうしたとき、十月初旬に北京を訪れていたハイレ・セラシエ皇帝のための夕食会で董必武・国家副主席がこれまでの通例どおり「毛主席と林彪副主席の名で」は歓迎の杯をあげなかったこと、新華社はこのときの乾杯の模様について通例のような報道をしなかったことが明らかになった。次いで十月十一日のルーマニア工業展宴会での乾杯にも林彪の名前は出現しなかった。さらに十三日の北京放送は、北京を離れたハイレ・セラシエ皇帝の感謝電を伝えたが、そこにも林彪の名は抜け落ちていた。

そして十月十六日、平壤で催された中朝放送協力協定調印に際する祝宴では、参会者が林彪の名をあげて乾杯したのに、新華社は、この事実をはぶいて報道した。このころ、広州市はじめ各地で林彪の写真が消え、林彪が毛主席と並んでいる写真ははずされて毛主席だけの写真になったと香港で伝えられた。

こうした経緯のち十月十九日の北京放送は人民解放軍瀋陽軍区部隊党幹部の手になる、「党の集団指導制」への服従を強調した

論文を繰り返し放送した。やがて十月二十日以後、一方では、キッシンジャー補佐官一行が北京で周恩来らと二度目の会談をしていたそのときに、モスクワ、ロンドン、台湾、そして日本政府筋から林彪失脚説や、「異変」からむ彼の死亡説が伝えられた。

十一月になるとソ連のタス通信とモスクワ放送は、それぞれ十二日と十六日に西側情報に依拠するというかたちをとりながら、林彪失脚説を公式に報道した。これらの「異変」のち、去る十一月十二日、中国共産党の『紅旗』第十二号は、先に見たように党中央の「野心家、陰謀家」への新たな糾弾を呼びかけたのである。

以上の「異変」の経過については、未確認情報は極力これを排除してある。したがって、劉少奇のソ連逃亡説とか、モンゴルでの墜落機に林彪あるいは黄永勝、はたまた劉少奇が乗っていたという一部外電の「情報」や、林彪の毛沢東暗殺計画失敗説、毛・林派の空軍司令官・法佐憲による黄永勝襲撃説という、いかなる意味でも確認し得ない情報は、もとより排除してある。こうした推測や「流言」が伝えられても、そのすべてを否定しきる材料がない今回の「異変」でもある



会津のよさは  
酒の良さ

品質本位

花春  
ハナハル

会津若松市 花春酒造株式会社

が、一連の「異変」を通じて得られる蓋然的な事実をいまここでは引き出しておこう。

これまでの経過から明らかのように、九月十日から十五日まで、北京で重大な緊急事態が生じたであろうことがまず推測できる。常識的に考えれば、国慶節までに全国人民代表大会大会が当初は予定されていたであろうが、全国人民代表大会延期の通達が九月十七日以降に出されたという情報を考慮すれば、全国人民代表大会大会へ向けての党中央委員会（三中全会）もしくは党中央政治局会議ないしはその拡大会議が召集され、そこではニクソン訪中の問題や、さらに国慶節をひかえて様々な重要課題が討議されねばならなかったと思われる。

そしてその会議の前後、もしくは最中に緊急事態が発生したものとと思われる。だが一方、北京の重要会議は、緊急事態発生後の事後処理のために開かれたものだと考えられなくはない。いずれにせよ、そのような事態のなかで軍の首脳が相次いで消えてゆく結果になった。

林彪の動静については、たとえ重病ないしは死亡という問題があるにせよ、それは自然なものだけではなく、去る七月のニクソン

訪中決定前後の時期もしくはこの九月中旬に決定的なポイントとして、林彪の地位にすでに政治的な変化が生じたものと思われる。そのことはまた当然、軍内部の問題に深い関連をもっているように思われる。そしてこのような「異変」にもかかわらず、当面は、周恩来が全面的なリーダーシップを発揮し、事態を一応は処理・收拾しているのではなからうか。

では、なぜ、そのような緊急事態が生じたのか。今回の「異変」の意味をより深く探究するために、九全大会以後の毛・林体制の変容のあとを次に簡単に見ておこう。

### 形骸化した九全大会路線

よく知られているように、中国共産党第九回全国大会は、文革收拾段階の重大な結節点であり、この九全大会によって毛・林体制は完全に固められたかに見えた。しかし、この大会は、ほぼ六八年段階から進んでいた文革收拾への動きのなかで毛・林主流派が強行的に上からの党再建をはかろうとしたものであって、毛・林体制の確立というにはあまりにも条件不十分な状態を背景としていた。したがって九全大会そのものが文革の渦中にあら

われた様々な潮流の妥協の産物であったといえるのである。

しかも、九全大会は、文革小組を中心とする文革推進グループの中堅的指導者層が軍内実権派を批判しようとしたカドですでに大部分失脚したのちに開催され、文革が奪権闘争の段階に入ってから全面的に指導力を発揮した軍の圧倒的優位のもとにおこなわれた大会であった。そうした状況のなかで、ともかくも九全大会は、林彪の政治報告と、林彪を毛沢東後継者と明文化した新しい党規約を採択したのである。そして九全大会以後の中国の主要課題は内政面では党の下からの再建、つまり「毛沢東思想」で純白化された党の全国的な再建であり、対外的には反米反ソ、とくに林彪の政治報告が全面的にそれを物語っている。しかし、九全大会以後、約二年半の状況は、九全大会路線が全面的に変容してしまっただことをいくつかの事実によって示しだしている。

まず党の再建であるが、本年八月、ようやく全国の一級行政区に再建された党委員会の実状を詳しく分析してみると、その実質は、

# このよき朝 輝ける未来を想い 新しい一年を寿ぐ



名古屋  
名鉄グランドホテル

名古屋駅南名鉄バスターミナル11F～18F

TEL (052) 582-2211

●案内所

東京—(03) 573-7681~3

大阪—(06) 344-2006~8

文革の論理と精神をいわゆる「三結合」(軍・党・大衆)によって妥協的ではあれ一応は体现していた革命委員会とも大きく異なり、文革期に紅衛兵から激しく批判された旧幹部をふくむ軍指導者と周恩来系統の行政官僚との結合という九大大会以後の中国のリーダーシップの性格をそのまま反映したのになつてゐる。それだけに、各地方のリトゲーションにもそうした方向に向けてたえず動揺があり、過去一年間に地方の責任者の四分の一が更迭ないしは失墜していった。

九大大会で新しく選出された党中央委員・候補についてみても、文革期に大活躍して毛・林主流派とみられた地方の指導者は劉格平(山西省)、王効禹(山東省)、潘復生(黒竜江省)、黎原(湖南省)、聶元梓(北京市)、劉結挺(四川省)、曾雍雅(チベット自治区)

などが相次いで失墜してしまつた。そうしたなかで、もっとも注目されるのは文革の実質的推進にない、文革の司令部といわれた文革小組組長・陳伯達の失脚である。毛沢東の政治秘書というキャリアから毛沢東側近として文革にもっとも重要な役割を演じ、劉少奇ら実権派を根こそぎ打倒するといふ巨大な任務を推進して九大大会では党中央政治局の五名の常務委員の一人に選出された陳伯達は、昨年八月一日の建軍節以来、まったく消息を断つてしまつた。問題の重要なゆえか、その失脚が名指して証明されてはいないものの、この一年来、彼にたいする批判は様々なかたちで展開されてきている。

昨年九月の二中全会ですでに陳伯達失脚が確定したのではないかという推測は今日、ほぼ確実視できよう。

まず本年元旦の『人民日報』ほかの共同社説以来、ニセのマルクス・レーニン主義を見破り、本物のマルクス・レーニン主義を学習せよというキャンペーンが始まり、「本来マルクス主義の敵でありながら、なんとマルクス主義の『理論權威』になりすましてゐる」(『紅旗』一九七一年第五号の山東省党委員会執筆小組論文)人物の糾弾がつづいたが、やがて三月以降は、三〇年代の「国防文学」論争を『紅旗』、『人民日報』、『光明日報』が再燃させて、「王明・劉少奇・周揚」批判のかたちをとりながら陳伯達批判を展開した。すなわち、三〇年代の「国防文学」論争を当時「休戦しようとした人物」、「人性・党性・個性」などと語つた人物が攻撃されはじめ、また七月一日付『人民日報』ほかの共同論文「中国共産党五十周年を記念する」は、「口

先では「とるに足らぬ老百姓」と自称しながら実はとんでもない大野心家」として彼を攻撃している。

いうまでもなく、「休戦」、「人性・党性・個性」、「とるに足らぬ老百姓」はいずれも陳伯達が発言した言葉であり、あるいは論文なのである。

このような陳伯達批判は、最近の相次ぐ「左」翼日和見主義批判、観念論批判とも関連して党内「左派」の退潮を象徴的に示しているのみならず、毛沢東の権威と指導力の後退をも示していると考えざるを得ない。

しかも、昨春秋、わが国にも伝えられた中国の「新憲法草案」は、文字通り「毛・林憲法」であったが、この「新憲法草案」は従来経緯からして陳伯達の起草によるものと思われ、その後、この「新憲法草案」が幻のように消えてしまったことの意味を以上の事実と考えあわせることもできよう。

さらに文革小組顧問でもあった党中央政治局常務委員の康生も本年七月四日以降、消息を断っているが、紙数の関係で康生問題にはいまはふれない。ともかく、最高指導部そのものが動揺と失墜者の連続なのである。

こうした内部的危機をほらみながらも、今

日、超人的な指導性を發揮している周恩来総理以下の有能な実務官僚と黄永勝を先頭とする軍指導者とが九全大会以後のリーダーシップを事実的にない、今日にいたったのであった。だが同時に、これらリアリスト・グループによるリーダーシップの確立は、とくに対外政策における九全大会路線からの離反をもたらし、毛・林主流派の対ソ対決路線にかわる中ソ関係の凍結、反米強硬路線にかわる今回の米中接近という大転換を中国にもたらしたのであった。

このような周恩来・黄永勝ラインのコンビネーションが六九年夏の中ソ戦争の危機回避に大きな役割を演じ、毛・林主流派の対ソ強硬路線を封じ込めたことは、その後の彼らのリーダーシップを著しく強化したものと思われる（これらの点については拙稿「中ソ国境会谈の重大な背景」、『アジア・クォーターリ』第二巻第二号「一九七〇年四月」ほか、参照）。

しかも、周恩来は、この間、中国の内政・外交の第一線に立ってきわめて重要な役割を演じ、同時に、陳毅、廖承志、張平化、趙紫陽、旧幹部の復権をはかり、黄永勝も、李作鵬、邱会作ら党中央政治局の委員を兼ねる人

民解放軍の副総参謀長や許世友（南京军区司令）、陳錫聯（瀋陽军区司令）ら同じく政治局委員を兼ねる地方军区指導者（いずれも今回の「異変」で消息不明）との連携のうえに目覚ましい活躍をしてきたのであった。

こうして、今日の中国の政治体制のなかで軍幹部の優位は圧倒的なものになっていった。たとえば新しい党委員会についても一級行政区党委員会第一書記二十九名のうち二十一名は軍幹部であり、判明した党書記についても、その九〇パーセント以上がやはり軍幹部である。

これにたいして革命大衆代表は寥々たるものであり、ここにも文革の論理の挫折が見られるが、黄永勝は今回の「異変」まで、そうした軍幹部の台頭にふさわしいだけのリーダーシップを發揮していたといえよう。

こうして、九全大会以後、今日にいたる過程は、毛・林体制の象徴的な変容過程であり、九全大会路線の明白な後退過程であった。

このことは、「毛沢東体制下の非毛沢東化」が徐々に進行していたことの表明でもあり、最近の「集団指導制」の強調は、たんに林彪問題にからむ毛沢東後継者問題のみに限定

されない意味をもっているのかもしれない。

この点で注目されるのは、最近の『人民日報』が主観主義・セクト主義にたいする批判とともに復権した旧幹部を擁護する記事を載せていることであり、また、たとえば『紅旗』第九号の楚洪舒論文「出版部門はもっと多く、もっと良い普及読物を出せよ」といった論評がはじめてのことである。後者の論文は、『毛主席語録』がすべてであった時期と隔世の感を憶えさせるものであり、出版について明らかに毛沢東著作以外の普及読物を要求し、そのための「大胆な創造精神を要求」しているのである。

ともかく、今回の『異変』が、以上のような背景のなかに位置づけられねばならないことは明瞭であろう。

### 問題の核心はなににか

さて私は、さらに問題の核心に向って筆をすすめなければならぬ。『紅旗』最新号（第十二号）が指す党内にもぐりこんだ「野心家、陰謀家」とは誰なのか。また、なぜ今回のような『異変』が生じたのか。これまで分析を経て得られるいくつかの可能性を考えてみよう。

ここで『紅旗』最新号のもう一つの重要論文江蘇省党委員会執筆小組の「党のすぐれた作風を発揚せよ」をみると、そこにはまたきわめて注目すべき指摘がある。

この論文は例によって太字で毛沢東の言葉を引用しているのだが、ここで注目されるのは、「紅軍第四軍の共産党のなかに各種の非プロレタリアートの思想が存在しており、これは党の正しい路線の執行にとつてきわめて大きな障碍である」という中国革命当時の毛沢東の言葉の引用である。

紅軍第四軍とは、周知のように林彪が軍長をしていた中国革命の主力軍であったが、なぜ、いま、紅軍第四軍にあえて言及しているのだろうか。

これは明らかに林彪批判であろう。しかも、この論文は一九五九年に彭德懷・前国防部長が毛沢東とまっこうから対立した廬山会議にも言及し、廬山会議こそ重大な階級闘争の決戦場であり、二つの階級の生死の闘争の場面であったという毛沢東の言葉を強調して、さらに全体的には「宗派主義」を激しく非難している。

そして、先にふれた、もう一つの『紅旗』論文（河南省党委員会執筆小組論文）は、

「知己、同郷、同学、心の友、親愛者、古くからの同僚、古くからの部下」などがなれあって、派閥をつくっているのは「自由主義」だとしてそうした「野心家、陰謀家」を糾弾しているのである。これらは、きわめて深刻かつ重大な指摘であろう。

かつて林彪は文革さなかの十一中全会（一九六六年八月）で毛沢東の偉大な天才ぶりにふれ、自分はとも毛沢東には及ばないと表明したあと、みずからが毛沢東の後継者となることについて、「だが、現在、主席と中央がすでに決定したので、私はただ主席と党の決定に服し、やってみて、うまくやるように努力したい。私はいつでも、もっと適当な同志と交替する準備がある」と語ったことがある（『八期十一中全会での林彪同志の講話』、未公開文献『毛主席文選』、所収）。

このように謙虚に語っていた林彪が大変な「野心家、陰謀家」だったのであるか。林彪失脚の可能性は、今日ますます濃厚であるが、問題は林彪のみに限られないような気がする。

九全大会以後の経過をみると、「知己、同郷、同学、心の友、親愛者、古くからの同僚、古くからの部下」を糾合して大きな勢力

を案じたのは周恩来でもあり、また黄永勝でもありのではなからうか。

だとするとまず問題は複雑化してくるが、論理的に考えれば、すでに毛沢東の後継者と規定されている林彪にはあえて毛沢東に挑戦する理由がないことも明白であろう。やはり問題は九全大会以後の重大課題をめぐる党中央の「闘争」にあることは明らかであろう。

先の廬山会議についての言及からしてみても、この九月中旬の「異変」の時期、あるいはそれ以前に党中央で重大な会議があり、そこで緊急事態が発生したと考えざるを得ない。その緊急事態が、九全大会路線の変容と修正にたいする林彪らの反逆であったのなら、論理的にも十分に説明がつく。

しかも、ニクソン訪中の受諾という中国にとって画期的に重大な対外政策上の選択は、今日のように失墜者の相次ぐ中央政治局ないしは中央委員会全体の合意によるものとはとうてい思われず、やはり周恩来のイニシアチブによって毛沢東の合意をとりつけたかたちでの決定であったと思われる。

しかもこのような選択は、党内はもとより、ヴェトナム労働党の「批判」にみられるように国際的なイシューにもなりつつあった

だけに、そのことが党中央の「闘争」に拍車をかける外圧として作用したであろうことも考えねばならない。

いずれにせよ、米中接近という中国にとつての重大な賭けが党中央全体の同意によるものでないことは明らかであり、このことはニクソン訪中決定直後の七月二十四日付「人民日報」に「公然たる挑戦」と題する評論員論文が掲載され、この論文は依然としてアメリカ帝國主義にたいする強い警戒と非難を展開し、米中接近にまるで冷水を浴びせている感があることから推察できよう。

そのような状況のなかで、林彪は周恩来路線に強い抵抗を示し、ついに失墜していたのか。これとも、ニクソン訪中の受諾を決定する過程ですでに林彪は失墜し、こうした林彪失墜に軍が抵抗したのか、一方、林彪が黄永勝ら軍内新実権派への攻撃（たとえば刑法憲がその担い手として）をおこなったのか、林彪と黄永勝グループとの対立ののち、双方がともに責任を負わされるかたちになり、九全大会以後ますます台頭しつつあった軍の勢力をここで一挙に党中央から失墜させるために、毛沢東、周恩来、江青、張春橋、姚文元ら非軍人首脳が連合したのか、そのいずれかであ

味い召せや  
三や柿羊羹天  
本店・大垣市

最近の相次ぐ「消息不明」者の多くが第四野戦軍系統の軍幹部であることもこの際、暗示的であるが、今回の「紅旗」諸論文は、このような深刻な事態を反映していることは間違いない。

いずれにせよ、このような事態の発生そのものが毛沢東の指導力の後退とその権威の低下を背景にしているものと思われる。

ただ、ここで気がかりなことは、今回の「紅旗」の各論文は、それぞれトーンが微妙に異っており、河南省党委論文は、江青、張春橋、姚文元ら文革グループの「左」からの周恩来批判とも受けとれることである。

もしもそのようなことであれば、これはまたきわめて重大な事態に発展しかねないであろう。われわれは当面、今後の推移をさらに注目し、分析の手がかりを待つ以外にないが、一方で、ニクソン・キッシンジャー路線は、このような中国の内面を十分に見透しつつ、いよいよこれから中国への「上陸」を周到に開始しようとしているように思われる。